

〔工芸の美展によせて〕

館藏品紹介 ^{そうがん} 朝鮮時代の鉄製銀象嵌筆筒について

朝鮮の高麗時代には、陶磁や金属工芸の分野で、異なる色の素材をはめ込んで文様等をあらわす象嵌技法が多用されました。日本でもこうした朝鮮の陶磁をもとに、唐津焼や八代焼で象嵌を施した陶磁が作られました。日本の陶磁の中ではこの技法は極僅かしか用いられていません。中国でも陶磁に象嵌技法は用いられましたが、主流とはなりません。金工では、江戸時代に肥後で刀の鐔に精巧な金銀の象嵌を施したことが知られています。そして朝鮮半島では、朝鮮時代に入ってから象嵌は陶磁・金工ともに引き続き盛んに行われました。工芸において、象嵌(朝鮮での用語は“入絲”)は高麗・朝鮮時代を通して朝鮮を象徴する技法とも言えます。

象嵌技法には幾つかの種類がありますが、最も古くから行われている基本的な技法が線象嵌で、表面に線状の彫り込みを入れ、その凹部分に金属では主に金や銀を、陶磁では胎土と異なる色の土をはめ込みます。線象嵌を施した作例として、銅製銀象嵌蒲柳水禽文浄瓶(図1 高麗時代 大和文華館蔵)が挙げられます。この作品は、胴部から頸部にかけて肥瘦のない

象嵌線が施され、柳の下の水流で鴛鴦が遊ぶ様が表現されています。これは同時代の陶磁器によく用いられたモチーフで、この作品では曲面に描くことによって空間的な広がりさえ感じさせます。その他には平象嵌、布目象嵌などがあります。布目象嵌は鍍金を施しにくく、硬い鉄製品に装飾する際によく用いられた技法で、朝鮮時代中期以降の小作品に優品が見られます。先端が平たい鑿を用いて表面を多方向に刻み、凹凸部に金や銀を叩いて埋め込みます。日本での布目象嵌の名称は、鑿の痕により、布状に見えることからきています。

ここで、布目象嵌が施された朝鮮時代の鉄製銀象嵌筆筒(図2 大和文華館蔵)について細かく見ていきたいと思います。本作品は、半円状の板二枚を接合した円筒形で、底部はわずかに底上げされています。鉄製の為に、手にするとずっしりとした重量感があります。

側面には全面に鑿をかけたような細かい斜位の刻みが見られ、銀象嵌で文様が施されています。実際はかなり使い込まれたのか、全体的に磨滅などにより文様がやや薄れていますが、銀の細線を用いて上部に雷文を配し、最下部には

平行線を二条廻らせています。その間には、卍繋ぎ文を地文として、方形の枠で囲った窓が四つ設けられ、窓内にはそれぞれ蓮、瓢箪、牡丹などと思われる植物があらわされています。窓枠の線や植物の莖などの太線は、地文で用いている細線を数本平行に象嵌して幅を出しています。花や瓢箪の実の部分には金色が僅かに認められ、この部分は銀線を重ねたのではなく、薄い銀板に鍍金を施して象嵌したと考えられます。さらにその上に、花卉などの細部表現をやや粗い線刻と魚々子(小さな円形の打ち込み)で行っています。

平行線を多用した緻密な卍繋ぎ文は崩れることなく正確に施され、整然と繰り返されています。それに対して、窓枠内の花々は波打つように蛇行しながら画面いっぱいに広がって伸び、枝分かれして上へ下へと自在に莖を曲げます。葉は平行線を用いた葉脈で示され、この様な図案化された表現によって、花々の描写はやや平面的な印象を受けます。しかし、そこには植物の生命力とその力強さが明快に示されています。これは民間の職業画家による「民画」にも共通する要素ともいえますが、ここには植物を身近なもの、または吉祥を象徴するものとして愛でた人々のおおらかな視線が反映されているように感じられます。本作品は、絵画的な図像の周囲を緻密な文様で縁取る構成をとります。

国家として儒教を重んじた朝鮮

時代には、上位の階級に属した人々は中国の文人と同様に、道徳性を備えた人格と知識を持つことを理想としました。このことは、紙や筆、墨、硯といった文房具が文房四友として愛好されたことや、室内を飾る絵画の画題として文房具類が多く用いられていることからもうかがえます。勉学に励む姿を見守るように子供部屋に置かれたとされる文房図の中にも、素材は不明ですが、本作品と同様の円筒形の筆筒が描かれています(図4 部分図 八曲屏風 朝鮮時代 韓国・湖巖美術館蔵)。

本作品の底部には、側面の文様と同様の布目象嵌で「大清乾隆年製」と篆書で記されています(図3)。朝鮮で制作された仏画に元や明の元号が記されていると考えられる作例があり、また、清代の元号も紀年銘中に見られます。中国と主従関係にあった朝鮮時代の社会的な背景から、当時の中国王朝である清の元号が用いられたとも考えられます。銀という高価な素材を用いていることから、公的な立場をとる官人が本作品の制作に関わっていたと考えることができるのではないのでしょうか。類品や中国と朝鮮の関係について、今後さらに調べていきたいと思います。(図4の図版は、講談社『李朝の民画』1982から複製させていただきました) (瀧朝子)

図 1



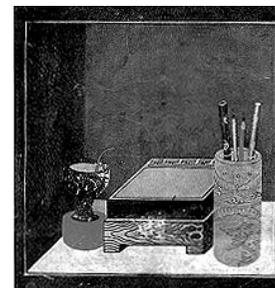
図 2



図 3



図 4



季刊 美のたより No.140

平成14年10月 5日

発行 大和文華館